

やはり俺のデモンズソウルは間違っている。

uparu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

はちまん、ロードランに立つ。

目次

第2話	第1話
4	1

第1話

「あなたには、デーモンを倒していただきます」

「・・・は？」

俺は死んだはずだった。

ある日、母ちゃんに「あんた、不死の印が出たんね。ロードラン行つてきなさい」

と、よく分からないことを言われた。

「なにそれ？たまご？」

「それはヨード卵しょ！バカなこと言っていないで、さっさと行ってきなさい！」

「へーい」

俺は、近所の養鶏場へ向かった。直売である。

「すみません、ヨード卵光ください」

「おう、八幡！いくつだ？」

「あー、そういや聞いてこなかったな。とりあえず1パックで」

俺は財布から3000円を取り出し、おっちゃんに渡した。

「はいよ！えー・・・300万円のお預かりね！60円のお返しやな！またこいよ！」

「はいよ、ありがとさん」

おっちゃん。お釣りも60万円て言っただけだったわ。あと、高いわヨード卵。

もつと安かった気がするぞ（適当）

帰り道。犬が道路を渡っていた。リードが外れてるな。

「サブレー！まってー！」

なんだか知らんが、犬が黒塗りの高級車に轢かれそうになっている。

「あぶねえー！」

俺は走り出した。

「キヤー！」

ドン！

俺は死んだ。

「はい、あなたにはデーモンを倒していただきます」

「いやそれさつき聞いたし」

気付いたら、俺はなんか神殿のようなどに倒れていた。

そしたら横に、黒髪ロングの絶壁美少女が、長い杖のような松明を持って立っていたのだ。

「で、なんなのここの？あんだだれ？」

「私は雪ノ下雪乃。この神殿の火守女よ。ここは楔の神殿」

よく分からんことを言う絶壁美少女だった。

「で、俺、帰りたいんだけど。母ちゃんにこの卵買ってこいって言われてたから」

俺はヨード卵光（1パック）が入った袋を見せて言う。

「没収」

「なんで!？」

没収された。母ちゃん、カツアゲに遭いました。ごめんな卵持って帰れなくて。

「では、その階段を上って財津くんのところへ行きなさい」

「財津？だれそれ」

「楔石の封印を解いてくれる人よ。詳しいことは彼に聞きなさい」

「お、おう」

俺は階段を上る。

「いや、エレベーターねえのかよ。なげえよこの階段」

クソ長い階段だった。

「はあーやつと上まで来たか…って通れねえじゃねえか！ふざけんな！」

変なモヤモヤしたものが行く手を塞ぎ、何故か通れなかった。

「はあああーあの絶壁女、舐めてんじゃねーぞ…」

急に気温が下がった。壁が凍り付いている。

「なんだよいきなり…こええなー階段滑るじゃねえか…」

ビビりながら階段を下りていくと、途中に通路があった。

「なんだよここかよ・見過ぎてたのかめんどくせえなー」
通り過ぎていただけだった。

「で、あんたが財津くん？」

「コートを着たウザそうなデブが座っていたので声を掛けてみる。

「ふむ、我は剣豪將軍、材木座義輝である！」

「あ、すいません財津くんじゃないのね、んじゃ失礼しました」

「まてーい！それ、我のことである」

「あ、そうなの。で？なんなのここ」

「ここはくさび」

「いやそれさつき聞いたし。で、なんか封印解いてもらえとかなんとか」

「これはしたり！まかせておけ！むーん！」

「・・・」

「ではこれからヌシはデーモンを殺してもらおう」

「いや意味わかんねえから」

「逝け！勇者よ！」

「いやなに言ってるんのお前」

俺はさつきの絶壁女のところに戻ることにした。

「うーす行ってきたぞー」

「正座」

「は？」

「正座」

「・・・はい」

怖かった。

「それで？絶壁女とは誰のことかしら？比企谷くん？」

「え、いやその・・・てかなんで俺の名前知ってるの？」

「質問に答えなさい」

「すみませんでした」

俺は土下座した。

第2話

俺はぜつぺ・・・雪ノ下に正座させられた。2時間。

「いつまで座っているの。早く行きなさい」

「へいへい」

「返事は1回」

「・・・はい」

奴隷が誕生した瞬間であった。

「で、どこ行けばいいんだ？」

「楔石に触ればデーモンのいるエリアに転送されるわ」

「え、家に帰れるんじゃないの？」

「何言ってるの？デーモンを倒すまで帰れないわよ？」

「・・・は？」

「いいから行つてきなさい。ゆで卵あげるから」

いやこれおれのヨード卵・・・

「わかったよ。ありがとさん」

ゆで卵1個もらった。

「で、楔石？いくつかあるけど、どこから行けばいいの？」

「私には、分からないわ・・・」

なんか悲しそう。走って階段上って行きそう。

「よく分からんが行つてくる」

「ええ。逝つてらっしゃい」

いい笑顔だ。なんか違う気がしたが。

「これが楔石とやらか」

ふと見ると、近くの階段にイケメン野郎が腰掛けていた。

「どうも。あんた何してんの？」

「ははは・・・俺はここで座っているんだ」

「あ、さいで」

そうだな座ってるな。話しかけたのは失敗だった。

「ちよつと話さないか？」

やっぱりウザい奴だった。

「え、いや俺は今からアレがアレでして」

「俺は葉山隼人。ここに来て2年になるんだ・・・」

語りだした。

「あ、そうですか。大変ですね。それでは」

「ここはね、くさび」

「あ、それも聞いたんで。じゃ」

悲しそうな顔でこちらを見ている。

「最低な気分だよ、二度としたくない」

そうですか。何したの？

「ずっと考えていたんだ。俺が壊してしまったものを取りもど」

「お察しします。それでは」

自分を壊してしまったようだ。お気の毒に。行く。

「これに触ればいいのか？」

俺が一番近くにある楔石に触れた。身体が光に包まれる。

「おおーなんだこれ？」

気付いたら目の前に大きな城門があった。閉まっているな。

「ここがヨードランか」

「いや違うしポーレタリアだし。あとそれ卵だし」

なんか金髪ロングの怖そうなギャルが不機嫌そうに立っていた。

「うお！びつくりしたあ・・・えつと・・・ポーノイタリア？卵出汁？」

変わった挨拶だな。

「は？なにナンパ？ウザいんですけど」

ここのアマ・・・

「あ、はい。すいませんでした」

俺は奴隷だった。忘れてはいけない。

「で、あんたも城に行くわけ？」

「え？」

「だから城に行くのかって聞いてんの」

「え、あ、はい」

「ふーん。あつそ」

なんかよく分からんが行ってしまった。怖かった。城に行けばい

いのか？

なんかいま、すごく大事なことを聞いた気がするんだけど。とりあえず行くしかないな。門閉まつてるけど行けるのか？」「なんかホームレス多いなここ。こええな。とつとと行くか」

城門に続く通路にはボロボロの服を着たオッサンがウロウロしている。

「やっぱり開いてないか。．．お？」

ガコン！ガラガラガラ．．

城門が開いた。ラツキーだ。

「あー！やつと開いたー！」

お団子髪のギャルがこつちに来た。

「は？．．．あ、ど、どうも」

「え？あ、え、えつと．．．どちらさまでしょうか？」

「ど、どうも比企谷です」

「ひきがや．．．うん！ヒツキーね！」

引きこもり奴隷が誕生した瞬間であった。

「お、おう．．．で、あんただれ？」

「あたし？あたしは由比ヶ浜結衣です！」

「そうか、じゃあな」

「こいつはアホの子だ。間違いない。」

「えー？一緒に行こうよーヒツキー、ねえー」

捕まった。柔らかない。

「いや、ちよつと今日はアレがアレでして」

「これしか言えないのかよ、おれ。」

「よし！じゃあレッツゴー！」

一緒に行くことになった。

城門の中に入ると夥しい数のスライムの集合体が槍と盾を構えていた。

「わー！なにあれキモーイ」

あいつだつて一生懸命生きてんだ。

「でもカワイイかも！」

キモイと言われた時点でカワイイも何も無いんだよなあ。

「あー端っこ通って行けば向こうに行けるよヒツキー！」

「お、おう。あれ、相手しなくていいのか？」

何のために居るんだ、あのキモいのは。

「あたし、ズルいんだ。卑怯な子なんだ。」

「あ、そう……」

キモカワイイ謎のスライムよ、さようなら。

「うーん……あ！あそこから行くのかな？」

城壁の上の通路を進むようだ。

「そうみたいだな。……ん？」

脇に通路があった。

「ヒツキー！どうしたのー？」

「ああ、こつちにも通路がある」

「ホントだ！ちよつと行ってみようよ」

「おう」

行き止まりだった。

「行き止まりじゃんヒツキー！もう信じらんない！」

怒られた。……誰か居る？

「愚腐腐腐腐……」

ヤバい。近付いてはいけない。

「あー！姫菜！こんなところに居たの？」

「ん？あ、結衣。ハロハロー」

ガハマさんの知り合いだった。